

災害支援・教育復興にむけて

つなぐ



日教組災害対策本部

〒101-0003

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

HP:<http://www.jtu-net.or.jp/>

## 連合・第4次被災地支援ボランティア 報告

### 今、私たちのできること

～全国から日教組の仲間が結集、8日間の記録から～

三好清隆（都高教副委員長）

日教組第4次の現地での活動が最後となった5月1日、朝からの雨をついて、岩手県の内陸部花巻市・東和ベースキャンプから大槌町に向かう。

（日教組別働隊8人は、初日の4月25日から大船渡市が担当場所。）大槌町は、釜石市の北隣にあり、沿岸部は他と同様、壊滅的な被害を受けている。町長はじめ役場職員の4分の1にあたる30数人が津波にのみ込まれ1700人以上の方が犠牲となった。戸籍原簿も津波に流され、庁舎は原形をとどめていない。



岩手高教組から2人が加わり（前日は8人）、日教組・自治労総勢21人で1軒の民家の「依頼」に取りかかる。海岸から5キロも離れているのに、地域を流れる小鎚川をさかのぼって津波が押し寄せ、1階部分は水没した。すでに瓦礫や畳・家財道具は運び出され、床板をはがし、床下のへドロを出して乾かしている。手分けをして障子14枚の紙をきれいにはがし、乾かす。カラーボックス等物入れの清掃・アルバムの泥の拭き取り。側溝のドブさらい。昼食をはさんで、午後からは庭一面のへドロのかき出し（土のう約90袋分）、石を

洗い消石灰を撒いて「ささやかな作業」は終了した。

全国から様々な救援ボランティアが大槌町・桜木町地区（およそ400世帯）にも来ている。隣接する遠野市社会福祉協議会「遠野まごころネット」が機能しており、多くのボランティアを受け入れ、沿岸部と連携をとって、運営している。臨時に開設された桜木町ボランティアセンターは、必死に被災者とボランティアをコーディネートしている最前線である。昨日は北海道・富良野の市民グループによるカレーと焼きそばの炊き出し（500食以上）。その前日は、千代田区から来たグループのつくね焼き。毎日入れ替わる炊き出しを楽しみにしている方も多

い。衣類を無償で提供する団体、温泉を運んで来て「足湯」を呼びかける若者、横浜から来た散髪のボランティアなど、それぞれの動機や思いに突き動かされて、被災地でボランティアが活動を展開している。連合ボランティアは、第1次からこの大槌町・桜木町地区に入り、その存在・働きは、ボランティアセンターや被災住民の厚い信頼を得ている。第4次のボランティアたちもまた「生きる励みになる」「本当に助かる・ありがたい」と、すべての方々から感謝の言葉をいただいた。一方で、被災地の雇用情勢は、悪化しており、今ボランティアがやっていることを「仕事」として、地元の新たな雇用を創りだそうという動きもある。



災害救援ボランティアは、被災地の雇用を阻むものではない。ただ単に「猫の手」として、家の片付けやヘドロや瓦礫の撤去のボランティアをやるのではない。被災地の人々とつながる、支え合うネットワークづくり・連帯、ともに生きることを確かめ合う重要な「作業」なのではないか。遅々とした歩みではあるが、被災地にも確実に変化が現れている。仮設住宅の入居も始まった。現地を見たこと、聞いたこと、やったこと、やりきれなかったこと、考えたこと等、それぞれの単組に帰って伝える「使命」がある。夏にむけ、日教組独自のボランティア隊の編成も計画せねばなるまい。



期間中、桜木地区は名前のおり桜が満開ののを迎えていた。被災地に人々が、ここから花見ができるのはいつになるのだろうか。重い課題と「思い」を背負って、2日早朝、東京に全員無事帰還した。

期間中、桜木地区は名前のおり桜が満開ののを迎えていた。被災地に人々が、ここから花見ができるのはいつになるのだろうか。重い課題と「思い」を背負って、2日早朝、東京に全員無事帰還した。

第5次のボランティアは、5月2日から10日までの期間、活動をしました。



第5次ボランティアメンバー 結団式にて